

どぶろく幻想

豊島与志雄

青空文庫

四方八方から線路が寄り集まり、縦横に入り乱れ、そしてまた四方八方に分散している。糸をこんぐらかしたようだ。あちこちに、鉄の柱の上高く、または地面低く、赤や青の灯がともし、線路のレールを無気味に照らしている。ぱつと明るくなり、轟々と響く。それが右往左往する。電車や汽車が通るのだ。長く連結した、窓々の明るい、汽車、電車。姿も黒く、窓々も暗い、汽車、電車。通る、通る、通る。やたらに通る。網目のような架線。電気のスパーク。石炭の黒煙。白い蒸気。高い台地の裾に繰り広げられてる線路の輻輳。駅はどのあたりやら見当もつかない。どうしてこうめちやくちやに線路を寄せ集めたものか。

中ほどに高い土手があり、土手の上が道路だ。下方は幾ヶ所も
割り抜かれて、線路が通っている。土手は二つに分れて、その先
が木造の陸橋。どこへ通じているのか、通る人もない。その土手
上の道路にふらりと踏み込み、右に落ちても左に落ちても直ちに
汽車か電車に轢かれることを思い、空を仰いで星々の光りの淡い
のを眺め、肌寒い気持ちで後に引り返した。その時から、方向を
取り失ってしまった。

東西南北の方向、固より厳密なものではなく、だいたいの見当
に過ぎないのだが、それが道行く時の指針となる。ただに人里遠
い平野に於てばかりでなく、都会の街路においても、酔ってる時
にはそうだ。多くの人は、たとい酔っても方向など頼りにせず、

ほとんど意識しないらしいが、俺にとっては方向が最上の頼りである。通り馴れた街路でも、深夜、方向の指針を失うと、どちらへ行ってよいか分らないし、電車に乗っても、車の走る方向に錯覚を起すと、全く不安になってくる。より多く動物的なのであるうか。

あの線路の輻輳地帯から、引返して、歩いて行つたが、もうすっかり、方向の指針を失っていた。第一、ひどく酩酊していた。立ち止つて深呼吸をやってみても、酔いを感じただけで、方向の感覚は蘇つて来ない。

それでも、とにかく歩いて行つた。ずいぶん歩いた。街路はぎらぎら明るくなつたり、闇に沈んで暗くなつたりし、俺は前に進

んだり、後に戻ったりした。どうしても辿り着きたかったのだ。酔いの一徹心で、是非とも、周伍文のところへ行つて、あのうまい濁酒を飲みたかった。もう十日間ばかり無沙汰していたのである。ずいぶん歩いた。

それらしい曲り角が漸く分つた。だが、暫くして、またも方向が分からなくなった。その辺、空襲の焼跡で、荒れるがままに見捨てられ、名も知れぬ雑草が茫々と生えていた。高い煙筒や壊れかけたコンクリート塀などが残っていた。もうだいたい夜更けなだろう。通行人も見当らなかつた。

雑草の中にわけ入り、腰を下して、煙草を吸い、方向を考え、そして……何をしていたやら。

淡い月がいつのまにか出ていた。

見覚えのある女の顔が、俺の方を覗きこんだ。見覚えはあるが、どこの誰だか分らなかつた。淡緑のセーターを着て、青いズボンをはいている。

「野島さん……。」

秋の夜気が身にしみて、へんにぞつとし、そして初めて分つた。なあんだ、周伍文のおかみさん、千代乃さんじゃないか。

「こんなところで……どうなすつたの。」

立ち上つたが、躓きかけた。

「道がすっかり分らなくなつた。」

「いらつしやい。こちらですよ。」

歩きだして、はつきりした。周伍文の店の近くなのだ。

表の戸は半分しまり、半分だけ開いていた。つかつかとはいってゆくと、その土間には客はなく、奥の小部屋で、周さんとも一人、差し向いで飲んでいた。

周伍文のこの店はありふれた小さな居酒屋で、おでん、焼酎、安物のウイスキー、などが並んでいた。だが、置台の横手の通路をはいると、奥にまた狭い土間があつて、そこでは、懇意なお客が特別なものを味った。豚肉や鶏肉や魚類の中華料理、どれもみなうまかつた。それから殊に、上等の濁酒があつた。粟で造つた薄味のものとか、雑菌がはいつてる酸味のものとか、あんなのではない。白米で厳密に製造した、真白なこつてりした最上品だ。

俺は毎晩のようにここに通ったものだ。ただこの十日間ばかり、心に深い悩みがあり、うらぶれて、馴染みの場所を避け、なるべく見知らぬところを彷徨していた。

俺の姿を見ると、周さんは立ち上って来て、手を執り、はげしく打ち振った。

「待っていましたよ。なぜ来ませんでしたか。どうしていましたか。なぜ来ませんでしたか。」

言葉はせつかちだが、へんに俺の顔色を窺ってるような眼色だった。

俺の方でも、なんだか、周さんの顔色を窺うような気持ちだった。

周さんの相手の男は、もう五十年配の同国人で、俺も何度か顔を合せたことがある。その男へ、俺の知らない言葉で周さんはべらべら饒舌りたて、相手はなんども頷いた。

そこの、腰掛に落着き、卓子に片肱でもたれかかり、甘酢の鶏肉をさかなに、温い真白な濁酒をあおっていると、俺はもう口を利くのも懶くなった。

周さんは、その同国人へは俺の知らない言葉で、俺には俺の知ってる言葉で、こもごも話しかけた。それが却って遠慮ない態度に見えた。

「あんた、いいところへ来ました。もう、どぶろくも無くなりかけた。今晚、飲んでしましましょうや。」

ばかなことを言ってる。無くなったら、新たに仕入れすればいいじゃないか。周さんももう酔ってるようだった。それでいて、濁酒のお爛なんか自分でしていた。

「つねちゃんは……。」

つねちゃんという若い女中がいたはずだ。

「暇をだしましたよ。今は、わたし一人きり。」

俺はあたりを見廻した。千代乃さんはどうしたんだろう。

「千代乃さんは、また出かけたの。」

「千代乃……もうわたし、諦めています。死んだ者は仕方ない。」

「死んだ者……。とぼけちゃいかね。さつき僕は、そこで逢ったんだから。」

周さんは腰を浮かした。じつと俺の顔を眺めた。

「あんた、なにも知らないんですか。」

俺はへんな気持ちで、周さんの顔を窺った。

周さんは突然、すっかり立ち上って、俺の腕を捉えた。

「千代乃に逢った……ほんとに逢いましたか。」

「逢ったとも。あつちの、焼跡のところ……そして、一緒に、

ここへ来たはずだが……。」

「たしかに千代乃ですか。」

間違いはなかった。言葉まで交わしたのだ。けれども、連れ立って歩いてきて、それから、後のことは、ぼーっとしていた。はぐれた、というより、彼女は消えてしまった感じだ。説明のしよ

うがなかつた。

周さんは俺の腕を離して、こんどは、同国人の腕を捉え、俺の知らない言葉でしきりと饒舌り、そしてふいに、卓上に顔を伏せて泣きだした。その肩を相手は軽く叩きながら、低い声でなにか言った。

やがて、周さんは涙の顔を挙げた。

「千代乃はあんたに好意を持っておりました。その話、ほんとうに違いありません。わたしも、あれから、千代乃に逢ったことあります。」

しんみりした空気になって、俺は事の次第を尋ねかねた。ただ酒を飲むより外はなかつた。

掛時計が十一時を打つと、周さんの同国人は立ち上り、周さんと短い言葉を交わして、帰っていった。

「さあ、あらためて飲みましょう。今晚はつきあつて下さいよ。それより、先ず、話を聞いて下さい。」

周さんはいろいろな料理を持ち出した。ありつたけの御馳走と言つてもよかつた。俺はもう食べられなかつた。その代り、濁酒をたくさん飲んだ。周さんはよく食いよく飲んだ。酔つ払つて、二人とも、話はしどろもどろだつたが……。

千代乃はほんとに死んでいた。家から逃げ出すとたんに、追っかけられて捕つては危いと思いつめたものか、かねて所持していた毒薬を呑み下し、そして駆け出したが、あの焼跡のあたり、俺

が彼女に逢ったあの辺で、もう毒が廻って苦悶し、雑草の中にぶつ倒れて、息が切れたのだ、と想像される。

早朝に発見されたその死体は、やがて解剖されたが、死因は毒薬以外には何もなかった。

「わたしが千代乃に逢ったのも、あの辺でした。」と周さんは言った。

「通りかかると、誰か、影のようにぼんやり立っている。それが千代乃です。一度は闇の中で、一度は霧の中でした。思いが残ったに違いありません。」

千代乃は周伍文によく尽してくれた。中国の戦争、次で太平洋の戦争、そのために周は東京での生活が次第に窮屈になり、横浜

の知人の家に身をひそめたが、千代乃は横浜にまでついて来てくれた。料理屋の女中をしながら、陰に陽に周を庇護し、周も彼女を頼りにした。

「言ってみれば、千代乃のスカートの中に、着物の裾の中に、わたしは頭を突っ込んで、そしてそんな時、最も安らかに息が出来るのでした。」

戦後、東京の今の家に戻って来て、飲屋を始めてからも、千代乃は実によく働いてくれた。

ただ、お互に、一つずつ祕密が出来た。

当時の飲屋のことだから、ヤミの品物を扱うのは止むを得なかった。それから、第三国人は税金を免れることが出来た。それに

眼をつけて、地廻りの男がよく飲みに来た。金を払う時よりも、払わない時の方が多かった。店の景気がよくなつてくると、土地でも有力な尾高一家の者まで、ちよいちよい顔を見せるようになった。尾高自身も来た。その尾高の強請によつて、千代乃は三万円の金を融通してやった。それが彼女の唯一の祕密だったのだ。

「女の祕密なんか、どうせばれるにきまつております。」と周さんは言った。「いや、ばれない前に、自分から白状しますよ。千代乃も自身から進んで、その祕密をわたしに明かしました。」

そこで、周は尾高に向つて、元金返済の催促をし、延びるようならば、月五歩の利子を払って貰いたい、と談判した。

「親兄弟の間だつて、金を貸せば利子を取ります。誰が無利子で

金を貸す者がありますか。今時、月五歩の利子といえ、たいへん安いものです。わたしが尾高さんに月五歩の利子を請求するの
が、どうしても悪いことがありますか。正当な権利ではありません
か。」

尾高もさすがに、千代乃から金を借りていないとは言わなかつ
たが、利子の件はそっぽ向いて取り合わなかった。そしてそれか
らは、濁酒の極上品の仕入れ先はどこかと、しつっこく千代乃に
尋ねかけた。だが、その仕入れ先こそ、周伍文の唯一の祕密だつ
たのである。固より、自家で造っているものではなかった。

「誰にも言ってくれるな、よろしい、誰にも言わない、そういう
約束です。男と男との約束です。信用の問題です。人間としての

信義の問題です。日本のひとは、約束を破って、祕密をもらすことを、自慢にさえしているようですが、わたしどもは違います。一旦誓った約束ならば、たとえ女房に対しても守ります。わたしは千代乃に、どぶろくの仕入れ先を、決して明かしませんでしたよ。」

その仕入れ先を、尾高がどうしてああまで知りたがったのか、理由ははっきりしない。つまりは、統制経済違反の確証を握って、周伍文を脅迫する意図だったとも見える。そして千代乃にしつこく迫ったが、千代乃自身知らないこととて、何の手掛りも得られなかった。それを尾高は千代乃の強情のせいだと思つたらしく、悪どい手段に出た。詳しいことは分らないが、女中の言葉などを

総合してみると、尾高は周伍文の不在をねらい、子分を二人も連れてきて、卓子に短刀を突き立て、罵詈雑言や脅迫の限りをつくしたらしい。千代乃は恐らく逆上の態で、とっさに毒を呑んで逃げ出し、そして草原で死んだ。

「純情といえますか、判断力が乏しいといえますか、可哀そうです。」

周さんは卓子に顔を伏せて、またも泣くのがあった。

だが、俺の頭には、千代乃さんの死がさほど深刻なものとは映らなかった。人おのおのの立場によるありふれたものとさえ思えた。何かのきっかけに依るもので、例えば、一足踏み外して階段から転げ落ちるようなものじゃないか。

実のところ俺は、死というものを、自殺というものを、漠然と考えていたのだ。漸く探りあてた一筋の人の心の誠実さ、真心が、ごく些細なことのために壊れかけるのを、見てきた。それが壊れ去った後は、人は完全に孤独だ。その孤独の中では、自殺も無理なくしぜんに行なわれる。場所と方法も自由に選択出来る。ぎりぎりの切羽つまった、どうにもならないものではない。

今日見た線路の輻輳地帯、いつもと違った道筋を取ったので初めて見たのだが、あすこでも、人はいつでも死ぬる。一步誤れば否応なく轟々たる車輛に轢かれる。だが、俺はあんなところで死にたくはない。だからぞつとして引り返した。

俺の頭にはいつとはなく津軽海峡が浮んでいた。特別の理由は

なく、しぜんに浮んできたのである。交通が自由ならば朝鮮海峡でも差支えないが、それはだめ。そこで、津軽海峡の青函連絡船。いつでも誰でも乗られる。敗戦後の日本には思いがけない立派な船だ。航程約五時間余。食堂で思いきり食べ思いきり飲むんだ。それから船の甲板をぶらつく。勿論夜分のこと。秋の夜の冷い潮風に吹かれて船室外をぶらついてる者など、恐らくあるまい。ただ俺一人。海峡の中ほど、夜気は冴え、海は暗く、空も暗い。その空に星を仰ぐ、オリオンでもスバルでも何でもよい。いや、赤い北極星がよかろう。北極星を仰ぎ見て、そのとたん、舷側の欄干の間から身を躍らす。体は宙に流れて、意識はもう茫とかすみ、海面との衝撃が最後の火花となり、あとは黒闇々の虚無の底。

船は航行を続ける。俺自身の一片だに後に残らない。だが、波浪のまにまに弄ばれる俺の体の、眼球の底の網膜には、北極星の映像が暫くは残るだろう。このオプトグラムが俺の最後の存在。

自由意志による方法の選択と、決行後の確実不可避な結果、これこそ真の自殺と言うべきではないか。

千代乃の場合、あるいは最後に星を仰ぎ見て、それが彼女のオプトグラムとなったかも知れないけれど、それはただ偶然のチャンスで、俺が理解する自殺の決意なんか、毒薬を嚙下する際にも果してあったであろうか。切羽つまつた羽目なんてものは、人生にはありがちなもので、そして大した意味はない。

周さんが泣くのを、俺はぼんやり見守るきりだった。

「日本人のうちで、ほんとうに心からわたしを愛してくれたのは、千代乃一人です。」

一人あれば充分ではないか。二人も三人もと、慾張つちやいけない。俺だって、たった一人を求めてきた。

とはいえ、その時俺は、周さんが日本人の俺に向つて訴えてるという、微妙な意味合いが分つてきた。同国人同志なら、違つた言葉遣いが出て来ただろう。

泣いてる周さんの顔は、窶れて肉が落ちたように見える。それが次第に大きく脹らみ、額や頬に肉が盛り上つてき、眼もかつと見開かれると、怒つてるのだ。

「千代乃を殺したのは、わたしではありません。どぶろくの仕入

れ先をわたしは千代乃に隠したが、良心に咎むるところありません。隠すべきを、当然、隠しただけです。貸金の利子を請求したのも、請求すべきを、当然、請求しただけです。ただそれだけのことで、千代乃は死ぬようなことになりました。わたしには訳が分らない。あの尾高たち、街のボスたちの根性が、わたしには分らない。慾張りというだけでなく、卑劣、邪悪です。戦争中わたしがどんなにいじめられたか、ひとには分りません。そしてこんどは、千代乃を殺しました。あんたたちは、しばしば、日本の軍部だの何だのと言いますが、ボスは軍部よりひどい。日本の国内で、日本の婦女を自殺させました。もし自殺しなければ、きつと刺し殺したでしょう。しかも、罪はどこにありますか。第三国人

のわたしを愛したのが罪でしょうか。ああ、千代乃が可哀そうです。そしてわたしも、可哀そうです。」

周さんには、憤りと悲しみとが交々起つて来るのだった。

復讐、ということも周伍文は考えてみた。暴力を以てではなく、法廷に持ち出しての抗争。だが、それは全く見込みないことが分った。先刻来ていた中老の男は、張というひとで、周から相談を受けて、いろいろ研究してみた結果、全然だめだということになった。こちらに弱みがある上、先方の尻尾はどこも掴めなかつた。そして単に自殺なのだ。

張は仲間うちでの有力者で、こんどのことについて、周の一切の面倒をみてやった。周はもう土地に嫌気がさして、また横浜に

立ち退くことになっていた。千代乃の葬式は簡単に済まし、横浜に移転してから改めて喪に服するつもりだった。

「ストック品が無くなったら、店を閉めて、横浜へ行きます。とにかく、商品は売らなければなりませんからね。千代乃の遺骨は、親戚のひとが持ってゆきました。荷物も持たせてやりました。金もやりました。もうわたし、一人きりです。」

しいんとして、潮の引いた後のようだった。さほど寒くもないのに、周さんがやたらにつぐ火鉢の炭火が、徒らに赤々としている。眠れない深夜のように。意識は茫としているのに、眼だけが冴えていた。酔ったばかりではなかった。

突然、周さんは頓狂な声を立てた。

「あ、ありました。一つ残っています。」

鏡台が残っていたのである。周さんも一緒に使っていたものはあるが、鏡台といえ、やはり千代乃さんに属するのだ。

「鏡は、女の魂とか言われていますね。」

古風な言葉だ。

「あれがある限り、やはり千代乃も残っている。そうではありませんか。」

「まあ、そうかも知れないね。」

周さんの眼を見つめると、周さんも俺の眼を見つめた。互に、何かを探り出そうとするのではなく、一緒に感じ合おうとするのだ。

「ほんとうに、千代乃に逢いましたね。」

囁くような静かな言葉だった。

確かに逢ったようだ。俺は頷いた。

「わたしも逢いました。二度逢いました。」

煙草の煙で室内は濛々としていた。時間がとぎれとぎれに空白となった。

「それでは、出かけましょうか。」

「そう、出かけてもいいね。」

なんのことだかはつきりはしないが、それでも、よく分つてはいたのだ。まだいろいろ饒舌り、その言葉は空に消え、そして感じだけが残っていた。

周さんは立ち上って、奥の室にはいり、電燈をつけた。俺もついて行つて、上り框から覗いた。

横手に、紫檀の大きな鏡台があつた。その鏡の裏側から、周さんは小さな姫鏡台を取り出した。朱色に塗つた玩具みたいなもので、どこかの土産物でもあろうか。それから、大鏡台の抽出を開けて、いろんな下らないものを取り出した。白粉やクリームの壘、化粧道具、櫛やピン、刷毛類など、たぶんもう使い古されたものばかりらしい。そして、そのうちの小さい物は姫鏡台の抽出に入れば、はいりきれない物は鏡の前に並べた。

周さんは俺の方を振り向いて、淋しげに頬笑んだ。俺は静かに頷いた。

周さんは有り合せの木箱を探して、姫鏡台とその他の品をつめこみ、上から紐で結えた。

それから周さんは、裏口の方へ行つて、鶴嘴と平鍬を持って来た。

俺は合着のオーバーを着て、木箱をさげ、周さんはジャケットのまま、鶴嘴と鍬を持った。

頷き合つて出かけた。

酔余のいたずら、でもないし、真面目な意図、でもないし、何が何やら分らないながらも、へんに俺は心が暗かった。滑稽であろうと、道化ていようと、とにかく、それを遂行しなければならぬ。

途中で、木箱がぐんぐん重くなってきた。

もう止めなければいけない。いつも愛人についてのいざこざで頭を悩まし、毎日酒に酔って彷徨し、そして心身を消耗すること、もう止めなければいけない。死を思い、自殺を思うこと、もう止めなければいけない。津軽海峡のことなど、もう止めなければいけない。

木箱はぐんぐん重くなった。

車除けの石があつて、俺はそれに腰を下した。

周さんも立ち止った。

「どうかしましたか。」

「箱がとても重くなった。」

「では、わたし持ちましょう。」

「なあに、いいよ。」

立ち上って、歩きだした。

「こんなこと、もうこれからは止めようよ。」

周さんは素直に答えた。

「止めましょう。」

暫く歩いた。

「もうこれからは、合理的に生きようよ。」

周さんは素直に答えた。

「合理的に生きましょう。」

それが、果して周さんとの問答だったかどうかは、分らない。

焼跡の草原まで来て、月が出てることが分った。薄曇りの空の
中天に、淡い半月があつて、地上には靄の気が漂つていた。

周さんは立ち止つた。俺が千代乃さんを見かけた所だ。高い雑
草の中に、周さんは数歩分け入り、そして地面を見つめた。千代
乃さんの死体が横たわつていた場所だろう。その辺、草は踏み荒
されていた。

周さんは鶴嘴をふるつた。だがそれには及ばなかつた。地面は
案外柔かく、鍬だけで充分だつた。二尺ばかり下に、小石交りの
固い層があり、そこを鶴嘴で突破すると、また柔かくなつた。四
尺ほど掘つた。

深夜のその作業は神祕じみていた。こそこそと侏儒どもが、地

下の宝物を発き盗もうとしてるかのような、錯覚が起った。然し現実に、穴を掘ってるのは周伍文であり、側で見てるのはこの野島だ。なにか滑稽で忌々しく、笑殺したいのだったが、反対にふつと涙が湧いた。

「もういいだろう。」

あたりを憚る低い声で言った。

二人とも穴を覗き込んだ。ただ黒々としている。俺は思いがけない自分の声を聞いた。

「アジアの憂鬱を、埋めよう。」

周さんは素直に答えた。

「アジアの憂鬱、埋めましょう。」

それも、果して二人の対話だったかどうか。

俺は木箱を周さんに渡した。周さんは木箱を穴に投げこんで、俺には全然意味も感情も通じない言葉を呟いた。それから鍬で穴を埋めた。地均しをして、草を分けて道に出た。へんに気がせい
て、ゆっくりしておられない思いだった。道に出てほつとした。

黙々として真直に歩いた。後を振り向きもしなかった。

周さんは家の戸を引き開け、俺がはいると、戸締りをしてしまった。俺を帰らせないつもりかも知れない。

周さんは裏の方へ行つた。手足を洗う水音がして、靴ではなく、下駄をつつかけて戻つて来た。

「ああ、これですっかり済んだ。」

独語のように言つて、俺に軽く頭を下げた。

炭火を盛んにおこし、濁酒を熱くして飲み、煙草をふかして、二人で顔を見合せたが、なんだか、夢から覚めたような白々しきで、そして胸うちに淋しい空虚があつた。

「張さんも、君の好きなようにするがいいと、言いました。前から考えていたことです。」

俺が何も尋ねないのに、周さんはそんなことを言った。

「そして、どうなの。」

「さっぱり、気が済みました。」

あんながらくたな品物ばかりで……。そしてあんなことで……。

「アジアの憂鬱……。」

口の中で言いかけて、俺はやめた。

不思議なのは、確かに夢ではなかったが、出かけてからこれまで、千代乃の名前が一度も出なかったことである。それで、その名前を聞いて俺はびっくりとした。

「もう千代乃は出て来ません。わたしは完全に一人きりです。」
地中に埋めたのは、アジアの憂鬱ではなく、千代乃だったのか。
周さんはまた饒舌りでした。

横浜に行つて、一稼ぎするつもりである。それから、中国に一度帰りたい。紹興の近在に、伯父や伯母や兄弟が、たくさんいる。横浜にはまた戻つて来る。その時は、紹興の本場物の老酒を、何十年も何百年もたった豊醇な老酒を、たくさんお土産に持つてこ

よう。そして酒好きな人たちに、ここへよく飲みに来た人たちに、贈物にしよう。みんな良い人ばかりだ。然し、街のボスたちはいけない。自分はもう千代乃についての怨みは忘れるつもりだが、それでも、ボスはいけない。日本にはもうこれからボスは少なくなるかも知れないが、その代り、ほかの嫌な奴が出て来るだろう。そんな奴が幅を利かせるだろう。日本は不思議なところだ。善良な人々と、邪悪な人々と、両極端に別れてるようだ。千代乃の淋しい葬式に対してだって、二通りの眼があつた。憎悪や軽蔑の念で見る眼と、愛情や同情の念で見てくれる眼と、二通りの眼があつた。その両方の眼を、自分のはつきり見て取つた。日本は、どうしてそうなんだろう。中国には、無関心か関心かの二つしかない

い。日本には、憎悪と、愛情と、両極端がある。どうしてそうなんだろう。自分が異国人である故からであらうか。

そんなことを聞きながら、俺の方では、憎悪と愛情との流転変質のことを考えていた。憎悪にせよ愛情にせよ、それは恒常的なものではなくて、いつも一方から他方へと移り変り、相対的な事関係によつて、刻々に変化する。愛すればこそ憎むなどと言うのは、おめでたい限りで、憎めばこそ愛すると逆に言ったら、どうなるか。

俺には、どぶろくだけが頼りだった。

「異国人の中にあつての憂愁だね。僕には、同国人の中にあつての憂愁が、いつももあるよ。」

「あんたとは別です。だから、憂愁があるなら、その憂愁を共にしましう。」

「よかろう、共にしよう。」

「今夜は、飲み明かしましょう。わたしのお別れの宴です。いくらでもある限り、飲んで下さい。」

酔眼ばかりでなく、酔った意識が、朦朧として、体も支えかねる心地だった。

ふと、眼を挙げて俺は、表の土間の方を見やった。そこは電燈も消えており、真暗で、その先方は戸締りがしてあるはずだ。

周さんも、俺の様子に気付いてか、表の方を見やったが、それだけで、ほかには何も感づかなかつた。

だが確かに、表の街路に女の足音がして、二度ほど戸が軽く叩かれた。周さんの言葉にも拘らず、千代乃さんじゃないか。それとも俺の錯覚か。あとはまたしいんとなった。

二人は倦きもせず濁酒をあおり、精神は朦朧となりながら、ぼつりぼつり語った。

俺はまた表の方を見やった。それにつれて、周さんも見やったが、何も感づかなかつた。

だが確かに、表の街路に女の足音がして、二度ほど戸が軽く叩かれた。千代乃さんじゃないか。それとも俺の錯覚か。あとはしいんとなった。

なんとしたことか、周さんは卓子に顔を伏せて泣いていた。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄著作集 第五卷（小説5 [# 5] はローマ数字、1-13-25）・戯曲）」未来社

1966（昭和41）年11月15日第1刷発行

初出：「群像」

1952（昭和27）年2月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：門田裕志、小林繁雄

2006年4月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

どぶろく幻想

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>